

鬼無町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 佐 藤 城 跡

2021年12月

両備住宅株式会社  
高松市教育委員会

## 例　　言

1 本書は、鬼無町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、佐藤城跡の報告を収録した。

2 調査地、期間及び調査面積は、次のとおりである。

調査地　　高松市鬼無町佐藤

調査期間　　令和3年1月6日～1月28日

調査面積　　132 m<sup>2</sup>

3 本調査を実施するに当たり、高松市・高松市教育委員会・両備住宅株式会社は「鬼無町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。

4 発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、全額両備住宅株式会社が負担した。

5 現地調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員品川愛、会計年度任用職員磯崎福子が担当し、整理作業は品川が担当した。

6 本書の執筆・編集は品川が行った。

7 本調査に関連する以下の業務を委託した。

出土鉄器のX線撮影・保存処理 愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター

遺物写真撮影 西大寺フォト

8 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。

9 遺構の縮尺については図面ごとに示している。

10 発掘調査で得られた全ての資料は、本書刊行後に全て高松市教育委員会で保管している。

## 目 次

<b>第Ⅰ章 遺跡の位置と環境</b>	
第1節 地理的環境 ······	1
第2節 歴史的環境 ······	1
<b>第Ⅱ章 調査の経緯と経過</b>	
第1節 調査の経緯 ······	5
第2節 調査の経過 ······	5
<b>第Ⅲ章 調査成果</b>	
第1節 確認及び工事立会調査の成果 ······	6
第2節 発掘調査の成果 ······	9
<b>第Ⅳ章 総括 ······</b>	19
第1節 弥生時代後期 ······	19
第2節 中世 ······	19

## 挿 図 表 目 次

図 1 高松市の地形と調査地 ······	1
図 2 周辺の主要遺跡分布図 ······	2
図 3 佐藤城跡推定地 ······	3
図 4 確認・工事立会調査出土遺物 ······	6
図 5 確認・工事立会調査平断面図 ······	7
図 6 遺構配置図 ······	8
図 7 SP1・2・3 平断面図 ······	9
図 8 SD1・2 平断面図・出土遺物 ······	10
図 9 SH1 平断面図 ······	11
図 10 SD3 平断面図・出土遺物 ······	12
図 11 SD4 平断面図・出土遺物 ······	13
図 12 ピット平断面図 ······	14
図 13 ピット・土坑平断面図 ······	15
図 14 中世遺構出土遺物 ······	16
図 15 SX1 平断面図 ······	17
図 16 佐藤城跡・佐料遺跡の立地 ······	19

## 写 真 図 版 目 次

図版 1 1 調査前風景	図版 3 11 SX1 出土遺物
2 西壁断面	
3 SD4 断面	図版 4 12 確認・工事立会調査出土遺物
4 SD4 完掘	13 SD3 出土高杯
5 SD3 断面	14 SX1 出土青磁
6 SD3 高杯検出状況	15 SP23 出土鉄器
7 SH1 断面	16 SP23 出土鉄器X線
8 SH1 木材検出状況	
図版 2 9 調査区北半完掘状況	
10 調査区南半完掘状況	

# 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分には高松平野が広がる。

佐藤城跡は高松平野の北西部、勝賀山の東麓に位置する。勝賀山の中腹部分は、風化した花崗岩で構成された緩斜面となっており、斜面中には小規模な谷が複数みられる。また、勝賀山の東麓では、花崗岩斜面中の谷から供給された土石流扇状地が広がっており、現在、土砂災害警戒区域に指定されている。

今回の佐藤城跡の発掘調査においても、砂礫層とシルト層が互層状に堆積する箇所がみられ、繰り返し土砂が供給されている状況が確認された。



図1 高松市の地形と調査地

## 第2節 歴史的環境

### 【旧石器～縄文時代】

サスカイト原産地の一つである五色台山地に近いこともあり、鬼無町周辺では高松市内の中でも比較的多く旧石器時代の遺跡が確認されている。香西南西打遣跡(7-2)では、剥片、石核類を含む旧石器が200点近く出土し、遺跡周辺で石材の加工が行われていたと考えられている。

縄文時代の遺跡としては、西打遣跡(10)、鬼無藤井遺跡(9)等が知られ、西打遣跡(10)では旧河道から縄文早期の局部磨製石器、縄文時代前期末の土器、石匙が出土している。縄文時代中期、後期の様相は不明であり、再び遺跡が確認されるのは縄文時代晚期である。西打遣跡(10)では、土坑から縄文時代晚期の粗製・精製土器、石器類が出土しており、周辺に集落域が存在したとみられる。このほか、鬼無藤井遺跡(9)でも旧河道から縄文時代晚期の土器が出土している。

### 【弥生時代】

弥生時代前期の鬼無藤井遺跡(9)では、縄文時代晚期以前の旧河道が埋没した後に、環濠集落が営まれる。環濠の直径は約70mであり、環濠の内側では竪穴建物等の遺構が検出された。また、香西南西打遣跡(7-2)や西打遣跡(10)でも旧河道等から弥生時代前期の土器がまとまって出土している。弥生時代前期の集落が消滅した後には、弥生時代後期前半まで遺構は確認されていない。西打遣跡(10)、鬼無藤井遺跡(9)の旧河道で弥生時代中期後半の土器がわずかに出土しているが、集落域が想定されるほどではない。弥生時代中期の空白期を挟み、佐料遺跡(4)では弥生時代後期中葉～後葉の溝が検出されている。溝からは当該時期の土器が多量に出土しており、佐料遺跡調査地は集落の辺縁部に当たると考えられている。

### 【古墳時代】

古墳時代中期～後期にかけて、勝賀山山麓を中心として古墳が築造される。古墳時代中期には勝賀山の丘陵部にかしが谷古墳群(14)、今岡古墳(29)が築かれる。かしが谷古墳群では、



1. 佐藤城跡 2. 佐藤温泉 3. 佐科城跡 4. 佐科温泉 (調査地點) 5. 藤尾城跡 6. 作山城跡 7. 香西南西打道跡 8. 芝山城跡 9. 鬼無原井溫跡 10. 西打造跡 11. 勝賀南寺  
 12. 勝賀城跡 13. 宍池西古墳 14. かしが谷古墳群 15. 善志塙古墳群 16. 平木1号墳 17. 平木3号墳 18. 平木2号墳 19. 平木4号墳 20. 鬼無大塙古墳 21. 山野塙古墳  
 22. 空家古墳 23. 古宮古墳 24. こめ塙古墳 25. 神高池西古墳 26. 神高池北西古墳 27. 神高池南西古墳 1号墳 28. 神高池南西古墳 2号墳 29. 今岡古墳 30. 王墓古墳

図2 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/11, 250)

4基の古墳が確認され、このうちかしが谷2号墳では竪穴式石室1基、箱式石棺1基が検出されている。今岡古墳(29)は中期初頭の前方後円墳であり、高松平野南部の中間・西井坪遺跡で製作された埴輪、陶棺が出土している。また、本津川東側の王墓古墳(30)では5世紀後半の円筒埴輪片が採取されており、古墳時代中期には平野部にも古墳が築造されるようになる。古墳時代後期になると、勝賀山南東の谷筋に神高古墳群(16~28)が築造される。神高古墳群では、全長10m前後の大型の横穴式石室をもつ古墳が複数確認されており、これらが7世紀の前半を中心に比較的短い時期に築造されたことが明らかにされている。

一方、古墳時代の集落域については前期の西打遺跡(10)が確認されているのみであり、古墳群の母体となった集落の詳細は明らかになっていない。

#### 【古代～中世】

古代には、勝賀山北麓に勝賀廃寺(11)が築かれる。勝賀廃寺からは川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土しており、白鳳期の創建年代が想定されている。また、佐藤遺跡(2)では、9世紀ごろの台付高杯、10世紀以前の土師器甕等とともに花瓶又は水瓶と思われる仏具的な遺物が出土しており、遺跡の性格として未発見の古代寺院、村落内寺院等の可能性が考えられている。

11世紀以降には、条里型地割溝が広範囲で認められるとともに、区画溝を伴う屋敷地が複数箇所で確認される。西打遺跡(10)では、11~12世紀前半と13世紀後半~14世紀前半の2時期、香西南西打遺跡(7-1)では15~16世紀の区画溝を伴う屋敷地が検出されている。

また、『南海通記』、『南海治乱記』等の文献資料によると、13~16世紀の鬼無町周辺は香西氏とその臣属の本拠地であったとされる。香西氏は、承久の乱で戦績を上げ、幕府から阿野・香川郡を与えられた氏族であり、常時の城として佐料城(3)、詰城として勝賀城(12)を築き、さらにその周囲に芝山城(8)等の出城を築いた。後には、本拠地を藤尾城(5)に移し、作山城(6)を築いたと言われている。なお、発掘調査によって発見された屋敷地の中には香西南西打遺跡(7-1)のように、出土遺物の年代、内容等から香西氏との関連が指摘されているものがある。

さて、今回の調査地である佐藤城跡は、『南海治乱記』の「讃州十河城兵糧記」に登場する。「讃州十河城兵糧記」は、山田郡の豪族十河氏が天正6年(1578)の干ばつ等による兵糧不足からの脱却を図るため、周辺の城を攻めた際の記事である。佐藤城

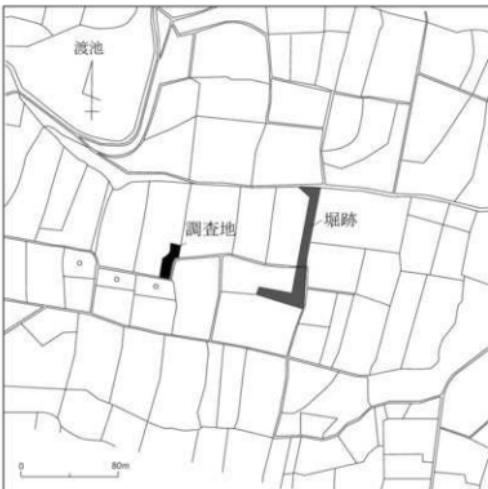


図3 佐藤城跡推定地〔香川県教育委員会2003に加筆〕

に関しては、「其後、笠居郷の佐藤か城堅固に構たる城なるを竊に入りて父子三人打殺し、資材糧米ことごとく奪ひ取る。」と記されている。以上の記事は「その後（天正10年（1582）以後）、笠居郷佐藤の城も堅固な構えだったのだが、（十河氏の一派が）忍び入って父子三人を打ち殺し、あらゆる物を盗み取った。」と訳され〔伊井1981〕、佐藤城は16世紀後半の居館であったことが分かる。佐藤城の城主に関する記事はなく、殺害された父子が誰であったかは明らかではない。佐藤城の所在地については、渡池南東部に堀跡とみられる逆L字形の地割が存在することから、当該地周辺に存在したものと推定されている（図3）〔香川県教育委員会2003〕。

#### 【参考文献】

- 伊井春樹訳 1981『南海治亂記（中）』教育社  
香川県教育委員会編 2000『西打道路I』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
香川県教育委員会編 2002『西打道路II』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
香川県教育委員会編 2003『香川県中世城郭跡詳細分布調査報告』  
香川考古刊行会 1994『香川考古第3号－特集香川の中期古墳－』  
高松市教育委員会編 2000『香西南西打道路』高松市埋蔵文化財調査報告第第 46 集  
高松市教育委員会編 2000『香西南西打道路』高松市埋蔵文化財調査報告第第 50 集  
高松市教育委員会編 2001『鬼無藤井遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第第 51 集  
高松市教育委員会編 2005『仲高古墳群』高松市埋蔵文化財調査報告第第 82 集  
高松市教育委員会編 2008『藤尾城跡 作山城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第第 117 集  
高松市教育委員会編 2014『佐科遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第第 155 集  
高松市教育委員会編 2017「22 佐藤遺跡」高松市内遺跡発掘調査概観』高松市埋蔵文化財調査報告第第 179 集

## 第Ⅱ章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

事業者である両備住宅株式会社により、当該地における宅地造成工事が計画され、令和2年10月13日付けで埋蔵文化財発掘の届出が提出された。既存の建物の解体を待ち、令和2年12月2日～3日に確認調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認した。

確認調査の結果を受けて、香川県教育委員会より令和2年12月14日付けで、切土部分については「発掘調査」、そのほかの部分については「工事立会」の行政指導があった。

その後、発掘調査の実施に向けて事業者と高松市教育委員会で協議を重ね、合意が形成されたため、同年12月23日付けで高松市、高松市教育委員会、両備住宅株式会社の三者で「鬼無町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する調査協定書を締結した。

### 第2節 調査の経過

発掘調査は令和3年1月6日から開始し、令和3年1月28日に終了した。主な工程は以下のとおりである。また、令和2年12月22日～令和3年4月30日に工事立会を行った。

- 1月6日 機材搬入、重機掘削開始
- 1月12日 重機掘削完了、遺構検出
- 1月13日 遺構掘削開始
- 1月21日 遺構掘削完了
- 1月25日 写真撮影
- 1月28日 機材撤収

整理作業は令和3年12月1日に開始し、同12月3日に終了した。

## 第III章 調査成果

### 第1節 確認及び工事立会調査の成果

確認調査では、2区画を対象として9箇所のトレーナーを設定した（図5）。

対象地の基本層序は、表土、灰色粗粒砂層（I層）、黒色シルト～粗粒砂層（II層）、黄橙色シルト～細粒砂層（III層）、灰色細粒砂～中粒砂層（IV層）、マンガン混じり黄橙色シルト層（V層）、灰色砂礫層（VI層・地山）である。このうち、II、III層は調査区全域で確認され、大局的には西から東へ傾斜する。また、III層以下の堆積状況は、地点によって異なり、南西側の区画では、III層の下にIV層、V層が堆積するが、東側の区画ではIV、V層は確認されなかった。

確認調査の結果、II層、III層、V層の上面で遺構が確認され、合計3面の遺構面が存在することが判明した（以下、II層上面を第1遺構面、III層上面を第2遺構面、V層上面を第3遺構面とする）。

第1遺構面では土坑、溝が検出された。遺構の埋土は粘性の強い黒色シルトである。SD②とSK①について精査したところ、SD②は幅約3m、深さ約0.6m、SK①は幅約0.4m、深さ約0.8mと遺構の深度が深い傾向にあった。遺構から出土した遺物は少なく、図化できたものは、SK①から出土した1、2のみである。1は土師器鍋の口縁部、2は移動式カマドの脚部であり、時期は片桐編年のI-3期（10紀前葉）と考えられる。

第2遺構面では、ピットを中心とした多数の遺構を確認した。ピットの規模はいずれも幅0.2m、深さ0.4m程度であり、埋土は灰色細粒砂である。また、3TRのSK③では弥生土器の小片が出土した。

第3遺構面では、2TRでピットを検出した。遺物は出土していないが、第2遺構面において弥生時代の遺構を検出しているため、弥生時代以前の遺構面と考えられる。

工事立会では、擁壁部分について調査を実施した。擁壁部分1では第1遺構面で幅約6m深さ約0.6mの溝1条を検出した（SD①）。また、擁壁部分3では第2遺構面で幅約0.2m、深さ約0.2mの溝1条（SD⑤）と深さ約0.1m程度の性格不明遺構（SX①）を検出した。SD⑤からは弥生時代後期の鉢（3）、SX①からは土師器鍋の口縁部（4）と土師器羽釜の口縁部（5）が出土している。4、5は口縁部の形状から佐藤編年II-3期（13世紀前葉）と考えられる。

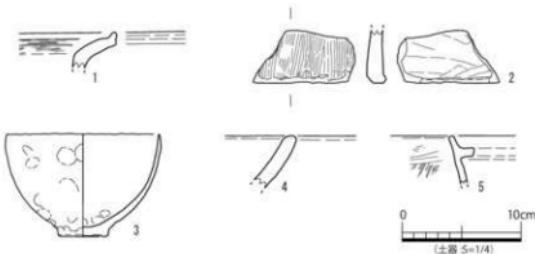
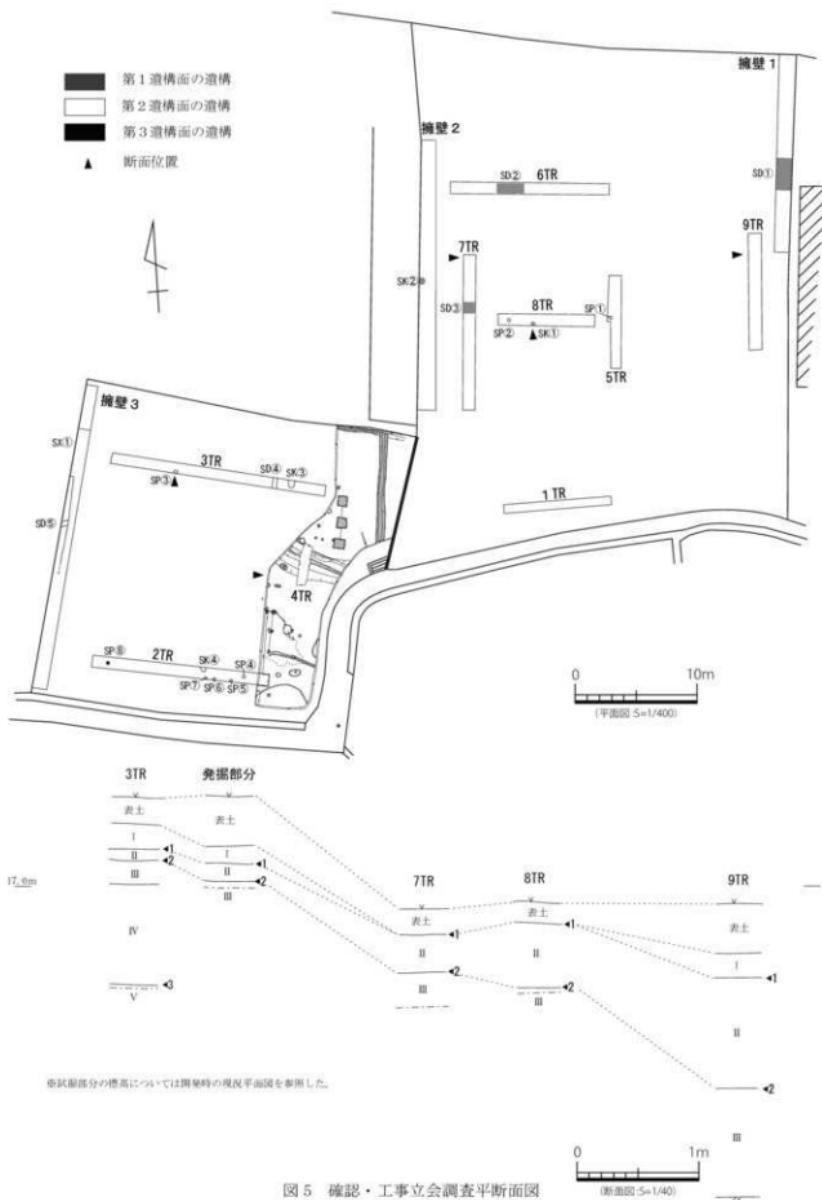


図4 確認・工事立会調査出土遺物



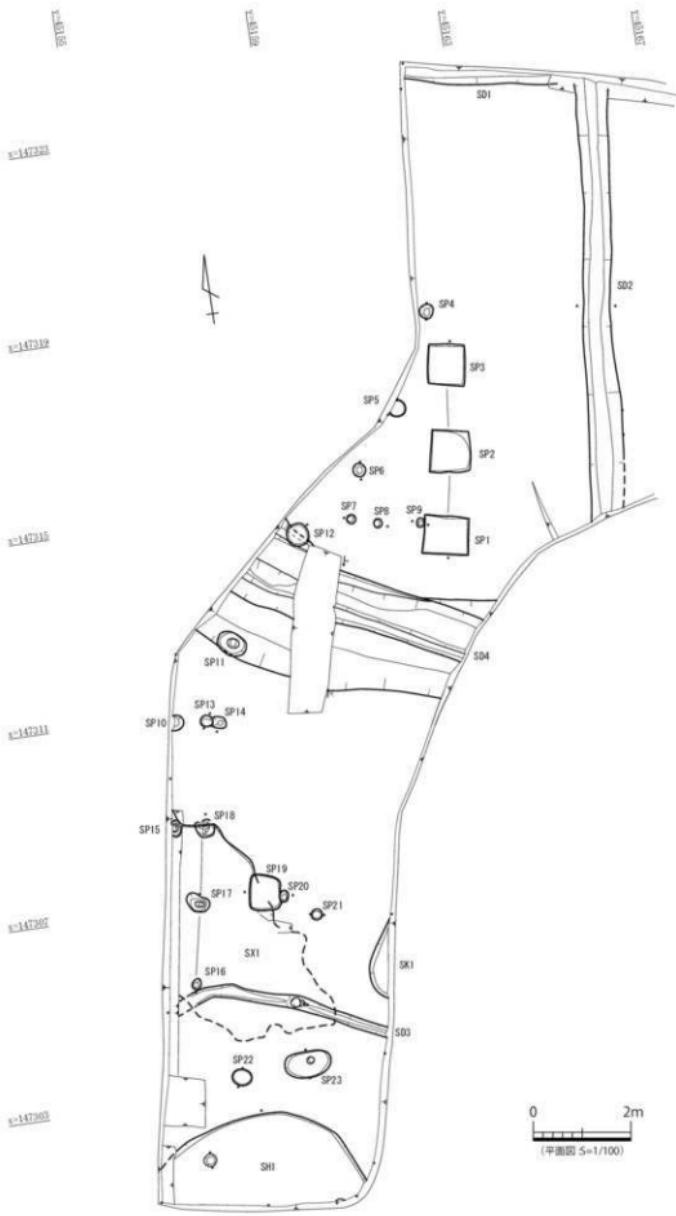


图 6 遗構配置図

## 第2節 発掘調査の成果

### 発掘調査の方法

造成工事において切土が及ぶ第2遺構面までを発掘調査の対象とした。発掘調査は表土から遺構面までを重機で掘削し、その後、人力により遺構掘削を行った。記録に当たっては、基準点をもとに、遺構の平・断面図を縮尺1/20で作成した。また、写真撮影にはデジタル一眼レフカメラを用いたほか、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いて撮影した。

### 第1遺構面の遺構・遺物

SP1・2・3 調査区北側で検出した一辺約0.7～0.9mの方形のピットである。遺構の埋土は黒褐色シルトである。SD1と直交、SD2と平行し、埋土も類似していることから、SD1、2と同時期のものであると考えられる。各ピットからは土器片が数点出土しているが、いずれも小片であり時期が分かることは皆無であった。

SD1・2 調査区北側で検出した溝である。SD1の規模は不明であるが、SD2は幅約0.6～0.7m、深さ約0.3mである。遺構の埋土は黒色シルトである。両者は直交する位置関係にあることから、区画溝として機能していた可能性がある。SD2の方角はN-10°-E前後と条里の方角と一致する。SD2埋土からは弥生時代後期の甕(6)が出土している。後述するように、第2遺構面が弥生時代後期と13世紀中頃の遺構面であることから、遺構出土遺物は周辺からの混入品と考えられる。

### 第2遺構面の遺構・遺物

#### 弥生時代の遺構・遺物

SH1 調査区南端で検出した竪穴建物である。平面形は円形又は隅丸方形と考えられるが、南側が調査区外に伸びており、正確な規模は不明である。床面は12層及び13層上面であり、竪穴建物内では2基の柱穴を検出した。また、床面上では炭化した木材や焼土塊が放射状に分布しており、これらは建物の上屋が焼け落ちて堆積したものと考えられる。遺構から出土した遺物は少なく、床面上で甕の体部片が数点出土したのみである。小片のため詳細な時期は不明であるが、胎土に角閃石又は雲母が多く含まれることから、弥生時代後期と考えられる。

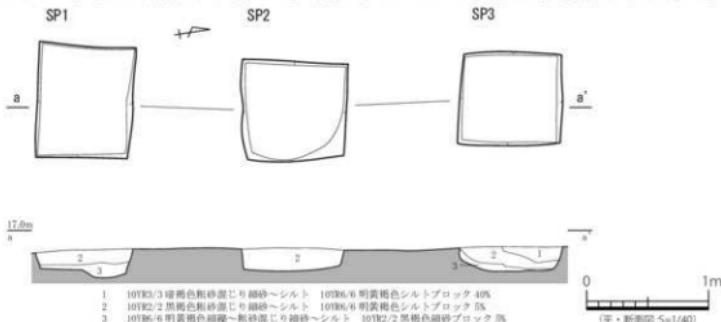


図7 SP1・2・3 平断面図

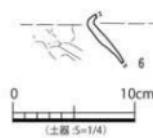
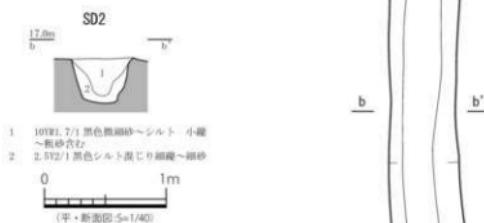
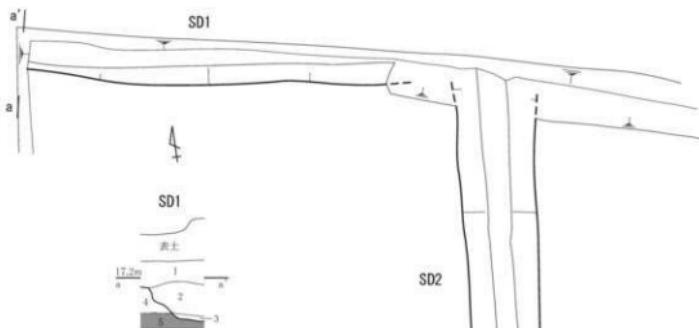
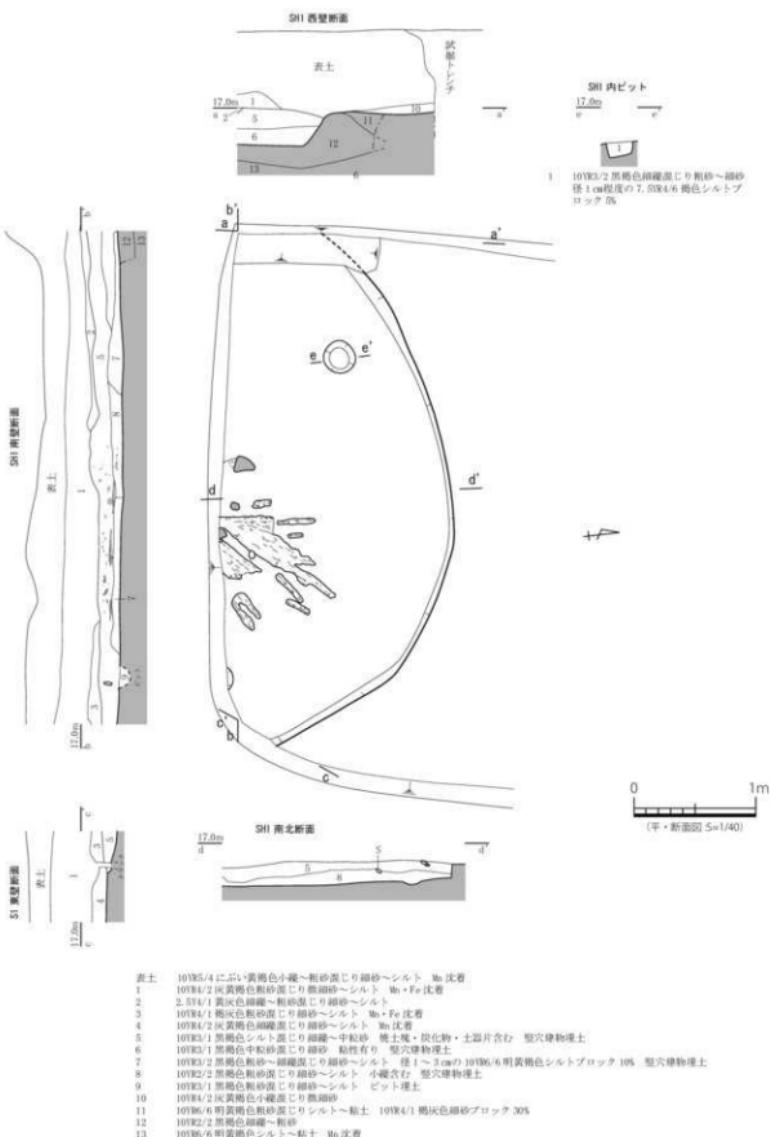


図 8 SD1・2 平断面図・出土遺物



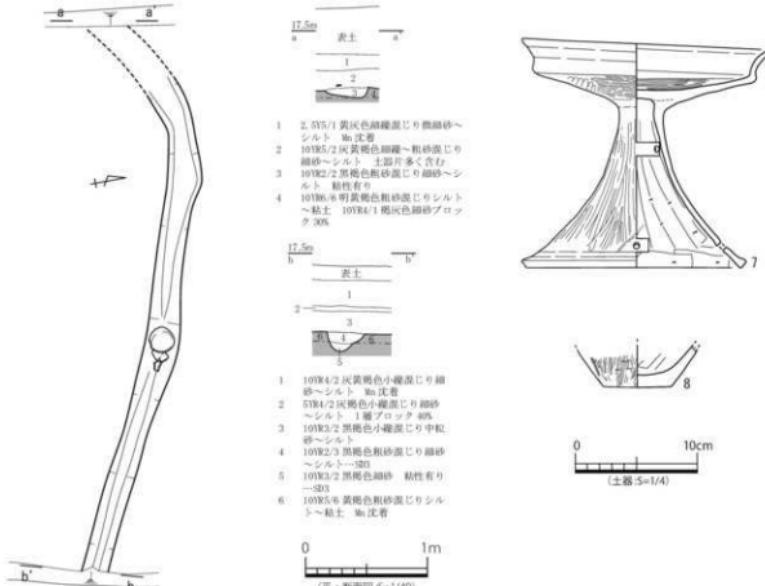


図 10 SD3 平断面図・出土遺物

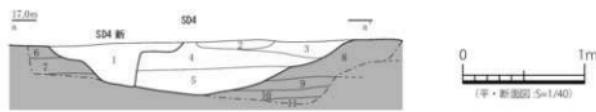
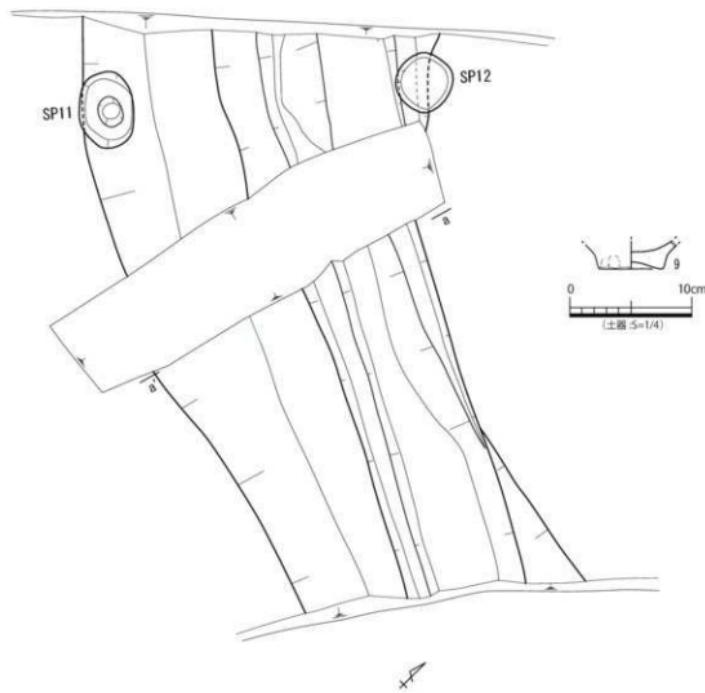
**SD3** 調査区南側で検出した幅約0.2~0.3m、深さ約0.1~0.15m程度の小規模な溝である。SX1に切られる。溝底面のレベルは、西から東へ低くなり、地形の傾斜に沿って流れていると考えられる。また、溝の中央部では高杯(7)が杯部を上に向けた状態で出土した。溝からは、高杯(7)のほかに甕の底部(8)が出土している。7は杯部径20.6cmを測る。杯部内外面には分割ミガキ調整がみられる。8は平底を呈し、外面にはタタキ痕が残る。高杯杯部と甕底部の形状から、いざれも弥生時代後期中葉のものと考えられる。

**SD4** 調査区中央で検出した幅約2.4m、深さ約0.4mの溝である。溝底面のレベルはほぼ同じであったが、周辺の地形から考えて西から東へ流れていると考えられる。溝埋土には切りあいがみられ、黄灰色粗砂～極粗砂層を主体とする層(2~5層)を粒径2~3cm台の礫を含む黄灰色極粗砂層(1層)が切り込む。1層は明瞭な立ち上がりがあり、平面的にも検出が可能であったことから、SD4の埋没後に再度同じ場所に形成された溝であると判断した。新しい時期の溝はSP12に、古い時期の溝はSP11に切られる。溝からの出土遺物は少なく、弥生土器の底部(9)が出土したのみである。9は底径5.3cmを測り、底部の形状は上げ底である。外面には指頭圧痕が残り、器面の調整は粗い。弥生時代後期中葉～後葉に位置づけられる。

#### 中世の遺構・遺物

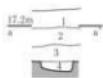
ピット20基、土坑1基、性格不明遺構1基を検出した。ピットについては特徴的なものや遺物が出土したもののみ以下に記述した。

**SP5** 調査区西隅で検出した。土師器皿の小片が出土したが小片のため図化していない。

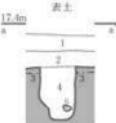
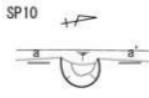


- |    |                  |               |
|----|------------------|---------------|
| 1  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  | 径2～3 cm大の蘊含物  |
| 2  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  |               |
| 3  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  | 地山ブロック含む      |
| 4  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  |               |
| 5  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  |               |
| 6  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  | 中層に薄い緑色泥じりシルト |
| 7  | 2. SY5/4 黄褐色細粒砂  |               |
| 8  | 2. SY6/6 明黄褐色シルト |               |
| 9  | 2. SY4/1 黄灰色細粒砂  |               |
| 10 | 2. SY5/6 黄褐色シルト  |               |
| 11 | 2. SY5/1 黄灰色細粒砂  |               |

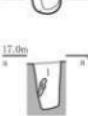
図 11 SD4 平断面図・出土遺物



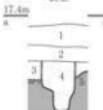
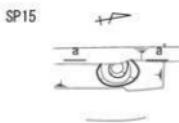
- 1 10YR5/2 黄褐色細繊混じり細砂～シルト
- 2 10YR2/2 黒褐色細繊混じり細砂～シルト
- 3 10YR4/2 黑褐色細繊～シルト混じり細繊
- 4 10YR3/2 黑褐色中粒砂混じり細砂～シルト  
径1cm程度の 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 10%



- 1 2.5Y5/1 黄灰色細繊混じり微細砂～シルト
- 2 10YR4/2 黑褐色細繊～粗砂混じり細砂
- 3 10YR6/6 明黄褐色細繊混じりシルト～粘土 10YR4/1 黑褐色粗砂ブロック 30%
- 4 10YR2/3 黑褐色粗砂混じり細砂～シルト  
細繊有り 径2～3cmの 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 20%



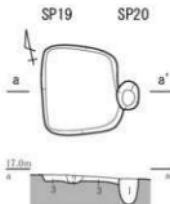
- 1 10YR4/1 橙灰色粗砂混じり細砂  
～シルト 径1cm程度の 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 25%  
2 2% エキナセ有り 細繊含む



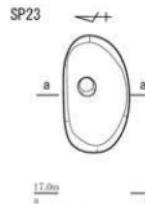
- 1 2.5Y5/1 黄灰色細繊混じり微細砂～シルト  
～粘土
- 2 10YR5/2 黑褐色細繊～粗砂混じり細砂  
～シルト 土器片多く含む
- 3 10YR4/1 黑褐色細繊混じり粗砂～細砂
- 4 10YR3/2 黑褐色細繊～粗砂混じり細砂～  
細繊
- 5 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト～粘土 10YR4/1 橙灰色粗砂ブロック 30%



- 1 10YR5/2 黑褐色中粒砂混じり細砂～シルト 径1cm程度の 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック 7% 粘性有り
- 2 10YR3/2 黑褐色細繊混じり粗砂～シルト 径1cm程度の 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック 3%
- 3 10YR3/2 黑褐色細繊～粗砂混じり細砂～シルト



- 1 10YR5/2 黑褐色細繊～シルト 小礫 有
- 2 10YR2/2 黑褐色細繊～シルト Fe沈着 小  
礫含む
- 3 10YR4/2 黑褐色粗砂混じり細砂～シルト  
径2～3cmの 10YR6/6 黃褐色粘土ブロック 30%



- 1 2.5Y4/1 黄灰色細砂  
混じりシルト
- 2 10YR4/1 黑褐色粗砂  
混じり細砂～シルト



図 12 ピット平断面図

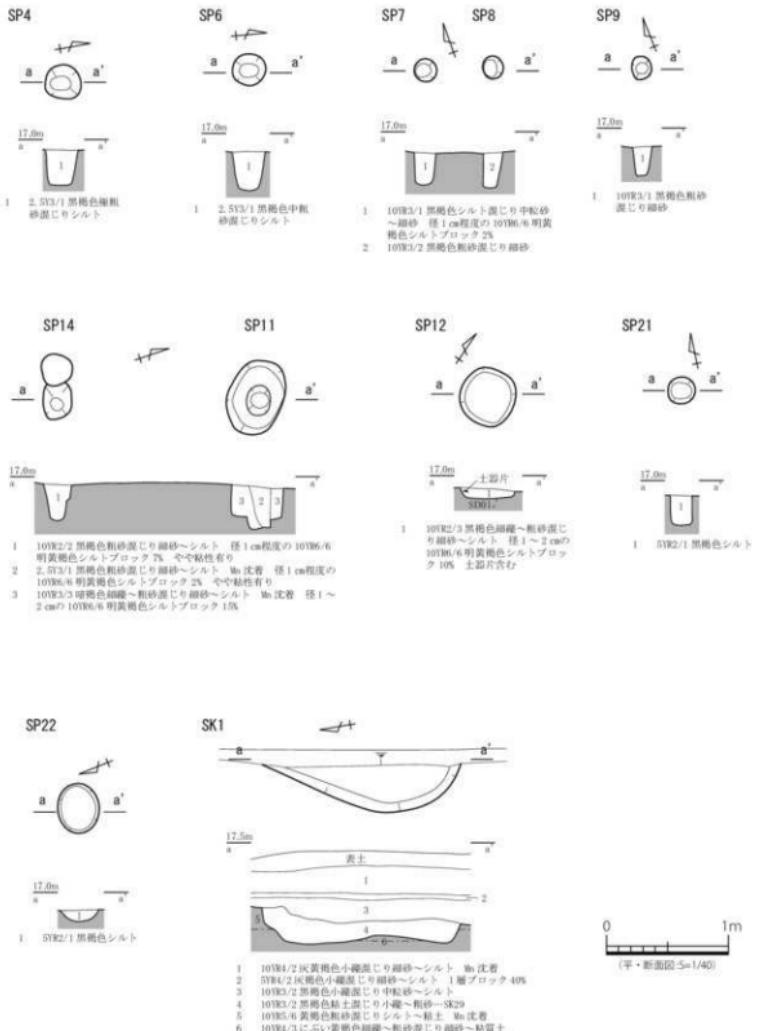


図 13 ピット・土坑平面図

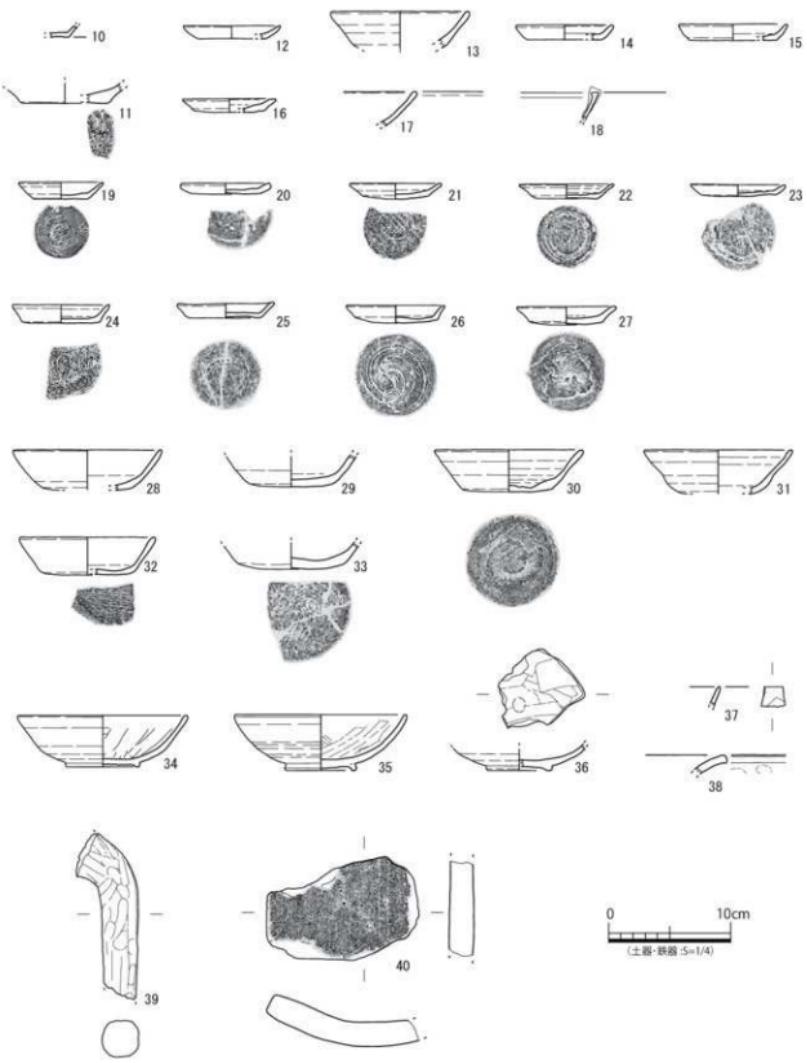


図 14 中世遺構出土遺物

**SP10** 調査区の西隅、SP13 の西側で検出した。埋土から須恵器皿（10）が出土した。器壁は薄く、内外面に回転ナデ調整が施される。佐藤編年〔佐藤 1993〕のIII-2期（10世紀後葉）とみられる。

**SP13** 調査区の南西側、SP10 の東側で検出した。SP14 を切る。土師器杯の底部（11）が出土した。底径は 7.3 cm であり、底部の切り離し方法はヘラ切りである。

**SP15** 調査区南半の西壁沿い、SP18 の西側で検出した。SX1 を切る。埋土からは、土師器皿（12）、土師器杯（13）が出土した。12 は口径 8 cm であり、口縁部は外傾して開く。13 は口径 11.2 cm であり、内外面にナデ調整が施される。

**SP16・17・18** 調査区南西側で検出した南北方向に並ぶピットである。ピットの間隔は約 1.3 m と等間隔であり、掘立柱建物のピットである可能性がある。また、間隔は異なるが、SP18 の延長線上にある SP13、11 も位置関係から掘立柱建物を構成するピットである可能性がある。SP18 からは土師器皿（14）が出土した。

**SP19** 調査区南半に位置し、SX1 を切り、SP20 に切られる。土師器皿（15）が出土した。

**SP23** 調査区南半、竪穴建物の北側で検出した。土師器皿（16）、須恵器椀（17）、鉄器片（18）が出土した。16 は口径 7.6 cm であり、体部には強いナデ調整が施される。17 は西村型須恵器椀の口縁部である。内外面にはナデ調整が施され、ミガキは省略されている。18 は鉄器片である。X線写真を撮影したところ、内部に気泡が認められたため鋳造品と考えられる。器種については、端部が肥厚していることから鉄鍋の口縁部である可能性が高い。

**SX1** 調査区南側で検出した土器集中部であり、SP16、17、18、SD3 を切り、SP15、SP19 に切られる。西壁沿いで断割り調査を行ったところ、北側では遺構の肩を検出することができた

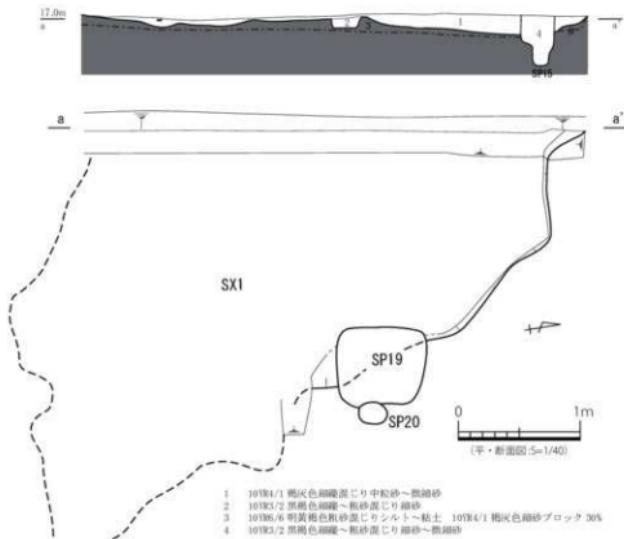


図 15 SX1 平断面図

が、南側では不明瞭であった。そのため人為的に掘削された遺構ではなく、自然地形のくぼみに形成された土器溜りである可能性がある。出土した遺物のうち、残存状況が良好なものや特徴的なものを図化した。

19～27は土師器皿である。口径は7～8cmであり、体部から口縁部にかけて外傾して開く。底部が確認できるものでは、底部の切り離し方法は全てヘラ切りである。28～33は土師器杯である。口径は11～12cmであり、底部の切り離し方法はヘラ切りである。34～37は椀である。34～36は西村型須恵器椀である。体部から口縁部にかけて直線的に伸びるものと、内湾するものとがみられる。体部内面には板ナデ調整が施され、底部には粘土紐が粗雑に貼り付けられている。37は龍泉窯系青磁椀であり、外面には幅広の鍋連弁がみられる。山本編年〔山本1995〕の椀I5bに分類される。38は土師器鍋の口縁部、39は土師器羽釜の脚部である。40は平瓦である。瓦の両面にはナデ調整が施され、凹面の一部には布目が残る。

遺物の時期については、各器種の形状や組み合わせから佐藤編年のII～3期（13世紀第2四半～第3四半期）と考えられる。

#### 【参考文献】

- 片桐孝浩 1992「考察—古代から中世にかけての土器様相」『川津元結木遺跡』香川県教育委員会  
佐藤竜馬 1993「香川県十瓶窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室  
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地IV』香川県教育委員会  
山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

## 第IV章 総括

発掘調査では、第1遺構面で13世紀中頃以降の溝とピット、第2遺構面で弥生時代後期と13世紀中頃の居住域が確認された。ここでは各時代の様相をまとめ、今後の調査に役立てたい。

### 第1節 弥生時代後期

発掘調査では堅穴建物1棟、溝2条を検出した。事前の試掘調査や立会調査でも弥生時代後期の遺構・遺物を検出しており、特に立会調査において検出したSD⑤は、規模や出土遺物の様相からSD3と同一遺構である可能性が考えられる。各遺構から出土した遺物の時期は、後期中葉～後葉が主体であり、集落の存続期間は比較的短いと想定される。

今回の佐藤城跡の発掘調査で発見された堅穴建物と小規模な溝という遺構の組み合わせは、当該時期の高松平野の集落遺跡で普遍的にみられるものである。例えば、弥生時代後期後半の天満・宮西遺跡、日暮・松林遺跡では、幅30cm前後の小規模な溝が複数棟の堅穴建物を接続した状態で検出されており、佐藤城跡でもこれらの集落と同様に複数棟の堅穴建物が集中する集落景観を呈していたものと考えられる。

また、佐藤城跡と同時期の遺構・遺物が検出された佐料遺跡と立地条件を比較すると、双方とも勝賀山から伸びる丘陵裾部の扇状地に立地していることが分かる（図16）。一方、西打跡や鬼無藤井遺跡といった低地に立地する遺跡では弥生時代後期の集落域は確認されておらず、弥生時代後期には勝賀山麓の微高地が集落域として選地された可能性がある。

### 第2節 中世

第2遺構面においてピット、土坑、性格不明遺構を検出した。遺構の切りあいがみられる箇所もあるが、出土した遺物はいずれも13世紀中頃であり、大きな時期差はないものと考えられる。今回検出したピットの中には、南北に等間隔で連なるもの（SP16、17、18等）がみられ、掘立柱建物を構成するピットであった可能性が想定される。その場合、建物の軸はN-10°-E前後と条里の方角と一致し、13世紀中頃には条里地割に沿った屋敷地が形成されていた可能性が考えられる。

ところで、『南海治乱記』には16世紀の佐藤城跡の記述がみられることは先に述べたとおりである。しかしながら、今回の調査で確認したのは、13世紀中頃の遺構・遺物であり、16世紀と断定できる遺構・遺物は確認されなかった。『南海治乱記』の記述が正しいとすれば、今回の調査区外に16世紀の屋敷地が広がる可能性が考えられる。あるいは、第1遺構面で検出した区画溝等が文献にみえる佐藤城跡である可能性もあるが、時期が分かる遺物が出土していないため断定はできない。今回の調査地は佐藤城跡推定地の一部分であり、文献資料との整合性については今後の調査例の蓄積を待って検証されることが期待される。

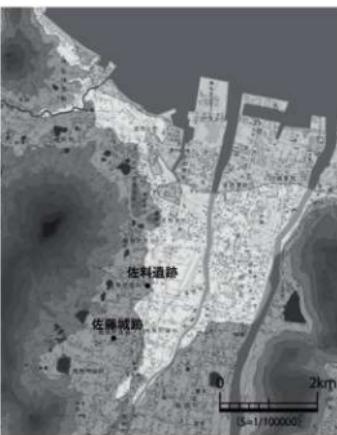


図16 佐藤城跡・佐料遺跡の立地

【参考文献】

高松市教育委員会 1997『日暮・松林道路』高松市埋蔵文化財調査報告第 34 集

高松市教育委員会 2002『天満・宮西道路～集落・水田編～』高松市埋蔵文化財調査報告第 60 集

高松市教育委員会 2014『佐科道路』高松市埋蔵文化財調査報告第 155 集

図版 1



1 調査前風景



2 西壁断面



3 SD4 断面



4 SD4 完掘



5 SD3 断面



6 SD3 高杯検出状況



7 SH1 断面



8 SH1 木材検出状況

図版 2



9 調査区北半完掘状況

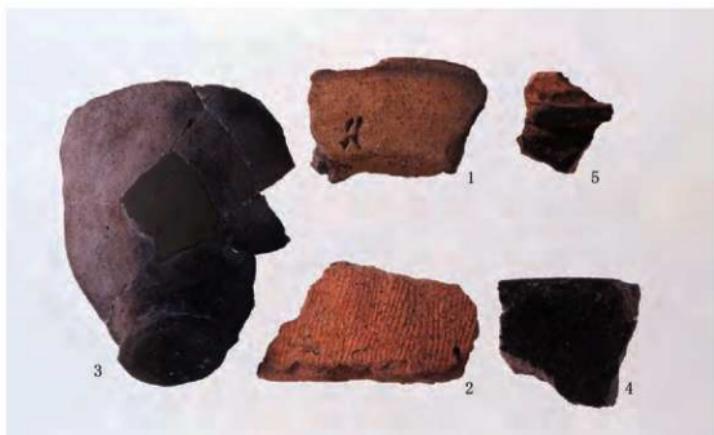


10 調査区南半完掘状況



11 SX1 出土遗物

図版 4



12 確認・工事立会調査出土遺物



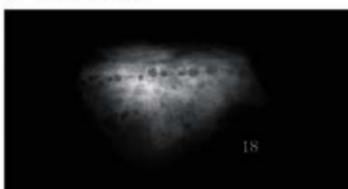
13 SD3 出土高杯



14 SX1 出土青磁



15 SP23 出土鐵器



16 SP23 出土鐵器 X線

## 報 告 書 抄 錄

---

## 佐藤城跡

高松市埋蔵文化財調査報告第 224 集

編 集 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目 8 番 15 号

発 行 兩備住宅株式会社  
高松市教育委員会

印 刷 有限会社中央ファイリング

---